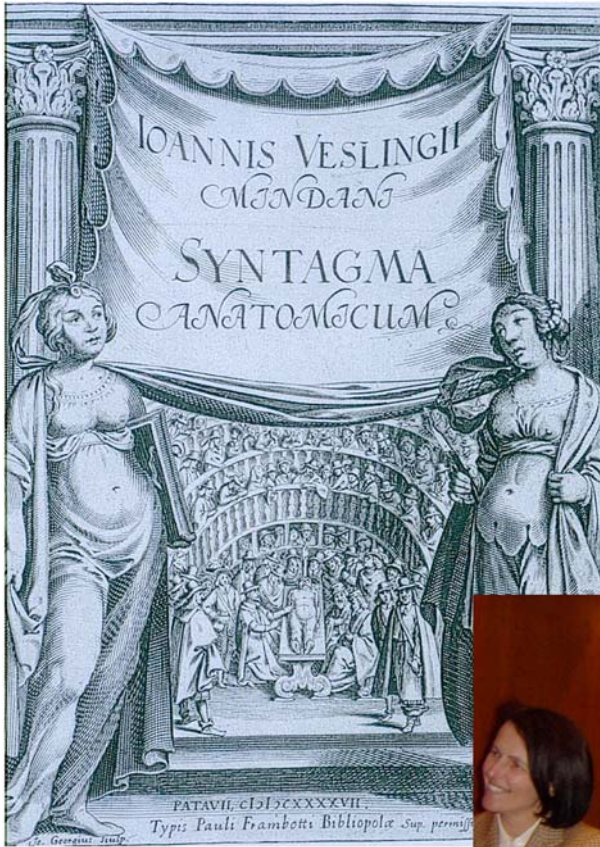




市民公開 開会式・記念講演会・演奏会

平成18年10月20日(金)午後5時より

於 自然科学研究機構 岡崎コンファレンスセンター



シntagマ アナトミクス || テレル ストーン (リュート)
アレッサンドロ リバ (講演)

<市民公開講座>17:15-17:40

修復により明らかになったファブリキウス (1537-1619)の業績とヨーロッパおよび日本の現代解剖学への影響

アレッサンドロ リバ (カリアリ大)
熊倉鴻之助 (上智大生命研)
村上政隆 (生理研)

1600年、アクアペンデンテのファブリキウス (1533-1619)は、「視力、声力、聴力をつくし、すべて実物大のカラー図版 (図譜) 300枚以上を含む人体/動物の解剖図譜を準備してきた」と報告している。ファブリキウスの死後原因は行方不明になっていたが、ベネチア共和国の国立図書館であったマルチアーナ図書館のジョセッペ ステルジ (1876-1919)が1909年追跡した結果、現在大判169枚の油彩が8ファイルに保存され、このうち43枚は3巻に納められ、ファブリキウスの5つの著作に含まれている。油彩原図のほとんどは造形美術の観点からも真に傑作であるが、図版にはラベルがなく、実際に描いた多くの画家は未だ不明である。解剖学をベースに図譜を見るとファブリキウスが非常に現代的であることは非常に驚きであり、ステルジの弁を借りれば、「15世紀から17世紀の間の解剖学上最も重要な仕事」といえる。事実、この図譜には多くの発見が描かれている。ファブリキウスはパデューアにアリストテレス流解剖学を持ち込んだが、彼が世界で最初に記載した発見には、とりわけ、瞳孔の光に対する感受性、出産時の動脈管/臍帯脈管の閉鎖、があげられよう。鳥類のリンパ器官にはファブリキウス囊として今や彼の名前がついている。彼の研究プログラムは学生たちに深く影響を与えた。その中にユリウス カッセリウス (1552-1616)、アドリアヌス スピ

ゲリウス (1578-1625)、ヨハネス ベスリンギウス (1598-1646)、ウィリアム ハーベイ (1578-1657)らヨーロッパからの学生が多くいる。カッセリウスはファブリキウスの学問上の強烈なライバルとなり、ハーベイは静脈弁について昔の教師ファブリキウスと反対の結論に達した。にもかかわらず、学生たちの発表した仕事はすべてアリストテレスの哲学に基礎をおいていた。レオナルドダヴィンチの素描やエウスタキウスの銅版画も数世紀の間に失われ、新しい解剖科学の発展には影響できなかった。しかしこれとは異なり、ファブリキウスの図譜に含まれている多くの発見は彼の生存中にも自由に利用でき(1)、彼の学生だった解剖学者の多くの本で発表された。事実、ファブリキウス学派に属したヴェスリンギウスは、ファブリキウスの後継者のひとりとしてパデューアの教室を主宰し、解剖書「シntagマ アナトミクス」をヴェニスで最初に出版した。この本を通じ、ヨーロッパの解剖学が初めて日本に入ってきた(2, 3)。さらに「日本における西洋医学の夜明け」をもたらしたクルムスの「ターヘルアナムトミア Ontleed-kundige Tafelen」の多くの図版は「シntagマ アナトミクス」から引用されていた(4)。(村上政隆 訳)

- 1) Ongaro G. Fabrici: dai manoscritti alla stampa. In: Rippa Bonati M and Pardo-Tomás J, eds. Il Teatro dei Corpi: le Pitture Colorate di Fabrici d'Acquapendente. Milano: Mediamed, 2004:17-30.
- 2) 小川鼎三. 医学の歴史. 中公新書 1964.
- 3) Bowers JZ. Western medical pioneers in feudal Japan. Baltimore: J Hopkins, 1970:66
金久卓也、鹿島友義 訳、日本における西洋医学の先駆者たち 慶応義塾大学出版会、1998.
- 4) Luyendijk- Elshout AM: Ontleedinge (Anatomy) as underlying principle of Western Medicine in Japan. In: Beukers et al. Eds. Red -Hair Medicine. Dutch

-Japanese medical relations. Amsterdam: Rodopi, 1991:32.

<市民公開演奏会>17:40-18:40 ファブリキウスの時代の音楽 ルネッサンス期から16世紀のリュート曲

テレル ストーン Terrell Stone: はアメリカ合衆国で音楽の勉強を始め、1974以来リュートの研究に勤しみ、バーゼルの Schola Cantorum Basiliensis ではユージン・ドンボア、ホブキンソン・スミスと、パリではフランク・オイラーとインターンとして勉強した。ペローナのイタリア国立音楽学校「FE Dal' Abaco」においてオーランド・クリストフォレッティの指導の下、最高成績で学位を得、長年ソリストとして南北アメリカ、ヨーロッパ、中東の音楽祭で重責を担った。室内楽でも活躍し、リュート、古リュート、テオルボ (17世紀の長い首が二つある弦楽器) での baso continuo を実現した。また、ラジオ、テレビ、レコード会社のために30回以上録音。ソロCDにはジョセッペ・プレシアネロの曲、ワルシャワ手稿 RM4137 からシルビウス・ワイスのパロクドリュートのための曲、最新のCDは世界的に有名なパドバ大学の解剖講堂で録音され16世紀のパドバリュート作曲家の曲を含んでいる。ストーンは25年以上イタリアに居住し、ローマの聖セシル音楽学校、バリーのNピッチーニ校でリュートを教え、現在、ピツエンツアのAペドロッコ校のリュートの教授、古楽の主席として教鞭をとっている。演奏会、録音、教育に加え、現代版リュート曲を編曲し、古楽の研究および学術論文発表を続けている。さらにリュート楽譜を書き、現代楽譜に転記するコンピュータプログラム Tastar de Corde も開発した。

17:40-18:40 リュート演奏会：プログラム

フランス国王フランスソワ1世宮廷からリュートによる楽曲 ～ルネサンス期～

- 1.前奏曲 P・アテニヤン
- 2.レジー・セクロールム C・ド・セルミジ/A・ド・リップ
- 3.バス・ダンス「刷毛（ブラシ）」 P・アテニヤン
- 4.愛 私が失ったもの J・リシャフォール/P・アテニヤン
- 5.ブランル第2番 P・アテニヤン
- 6.これは煙 作者不詳/P・アテニヤン
- 7.ブルゴーニュ風ブランル第4番 アンドリアン・ル・ロワ
- 8.ファンタジー18番 アルペール・ド・リップ
- 9.パヴァーヌ「ベニスの女」ガイヤール「ルーク」 P・アテニヤン
- 10.運命よ、私の人生を解き放せ P・アテニヤン
- 11.散りじりに去ってしまった C・フェスタ/A・ド・リップ
- 12.ピエモンテ風ガイヤール ギョーム・モーレ

《休憩》

イタリア、パドバのリュート音楽

～16世紀～

- 1.リチェルカーレ A・ロッタ
- 2.パッサメッツォ、跳ねるように、田舎風パドバーナ
- 3.やさしい聖母
- 4.薔薇とすみれ
- 5.La rocha' l fuso

- 1.リチェルカーレ J・バルベッタ
- 2.ロシアのバレ 「Cingan 風帽子」
- 3.アリア 1番
- 4.パドバーナ三重曲「a Lubiana」
- 5.アリア 2番
- 6.八度のパドバーナ「Zo per la Brenta」
- 7.ロシアのバレ 「Duda」

- 1.アルマンド エロルド手稿から
- 2.ガリアルダ
- 3.バレエ「デオミデイ」
- 4.クーラント
- 5.ヴォルト「美しい眼が欲しくてたまらない」
- 6.パヴァーヌ「涙」
- 7.ベルガマスカ

奏者：テレル ストーン（ピツェンツァ、ペドロロ音楽学校教授）
8コースリュート（15本の弦）：ポール トムソン（1989年製）

《用語集》

リュート：リュートは、ルネサンス・バロックの時代に流行した撥弦楽器で、ギターに似る古弦楽器。アラビア起源の撥弦楽器で琵琶の親戚。1700年代の半ばまで、ある時期には西洋音楽でもっとも重要な独奏・伴奏楽器の一つで「楽器の女王」とされた。その美しい音色と優雅な外見は天上の音楽を奏する楽器として大変もてはやされた。リュートが奏する優しい和音は「愛のこだま」と呼ばれ、女性を魅了すると信じられました。リュートが「楽器の女王」とされたのは、持ち運びが簡単で、一本だけで当時の曲の大半を演奏する事ができ、歌声と相性がよく邪魔せずに伴奏できた「パーフェクトな楽器」と見られていたため。しかし、高価なこと、調律が面倒なこと、広い音域をカバーする鍵盤楽器の発展等の理由で、18世紀の末にはほとんどがハーディー・ガーディー（当時の辻音楽師がよく使った楽器）に改造されほぼ絶滅した。現在演奏されるリュートの大半は、博物館等にのこっている楽器からの復元。ガリレオ・ガリレイの父親は優秀なリュート奏者と伝わる。

フランシス1世（フランソワ1世）Francis I：（1494～1547）ヴァロワ王朝9代目のフランス国王。度重なるイタリア遠征によりルネサンス文化に接し、ダ・ヴィンチ、チェリーニ等、多くのイタリア人芸術家をフランスに招き、フォンテンブロー、シャンボールなど宮殿の整備に協力させた。学芸を保護し、フランス・ルネサンスの父とされる。ダ・ヴィンチ死後「モナリザ」を所有した。

プレリュード（前奏曲）Prelude：組曲の冒頭に置かれて導入としての役割を持つ楽曲。

ブランル Branle：ブランルはフランス起源のダンス。語源は「揺れる」を意味し、輪になって足を横に運ぶのが特徴。17世紀初頭から広く愛用され、あらゆる階層の男女によって踊られた。

ガイヤール Gaillard：イタリア起源の3拍子系の陽気な舞曲で、16世紀に流行した。しばしば荘重なパヴァーヌやパッサメッツォと対の形で使われた。

パヴァーヌ Pavane：16世紀のイタリアを起源とする宮廷舞曲、その名はパドヴァ市の別名（パヴァ）に由来すると考えられる。通常ゆっくりした2拍子（初期には3拍子のものもある）で、しばしばそのあとに速い3拍子のガイヤルドが続く。

アルマンド：（アルメイン）Almande：「ドイツの」あるいは「ドイツ舞曲」の意。16世紀フランスで起こったゆるやかな2拍子系の舞曲のこと。ダンスの面からみると、男性と女性が腕を組んで踊るといふ「非貴族」的な要素を持ち、かつ跳躍のステップが多く使われる軽快な踊りであったため、フランス王侯貴族の舞踏会では特に若者の間で愛好された。

クーラント Courante：フランス語の「走る」という言葉に由来する舞曲で、元来は速く飛び跳ねるような動きを伴う踊りである。フランスでは高貴で品位のある雰囲気でも踊られるため、ゆっくり目の2分の3拍子で演奏された。一方、イタリア風では4分の3または8分の3拍子の速いテンポで演奏された。

ヴォルト Volte：フランス・プロヴァンス地方を起源とする8分の6拍子の舞曲である。3拍子系のガリアルドに類似するが、より軽快に踊られる。

ベルガマスカ Bergamasca：北イタリア・ベルガモ地方に発した舞曲。親しみやすい旋律を対位法的手法を最大限に用いた表現した。

《作曲家ノート》

ピエール・アテニヤン（c1494-1551または1552）：フランスの楽譜出版者。1514以前にはパリに居住し、1525頃までに楽譜出版を始めたらしい。今まで2～3回かかっていた印刷の工程を1回で印刷できるように改良。その方法がヨーロッパ全土に広がった。セルミジ、ジャヌカン、セルトン等のパリのシャンソンやそれらをリュート用に編曲した楽譜を多数出版する。

クローダン・ド・セルミジ（c1490-1562）：フランスの作曲家。国王の宮廷礼拝堂聖歌隊を中心に活躍し、ミサ曲、モテット、シャンソンなど多数の作品を残した。なかでもシャンソンは重要で、同世代の詩人マロの新しい詩に刺激を受け、伝統的な歌曲定型を廃し、最上声部に親しみやすい旋律を配して軽やかなリズム、ホモフォニー書法、簡潔な形式などを用いて新しいシャンソンの様式を生み出した。これは、ジャヌカンやセルトンをはじめとする同時代のシャンソン作曲家に大きな影響を与えた。

ギョーム・モーレ（c1510-1558以後）：フランス人ギター奏者、リュート奏者、ヴァイオリン奏者、作曲家。アルベルト・ディーバの弟子。モーレは、1552年にパリで、ロベール・グランジョンとミシェル・フザンダの出版社から『リュートのタブラチュアの曲集第1巻』、『ギター・のタブラチュアによる、様々なファンタジー、シャンソン [他]』を含む曲集第4巻』を出版。1553、同じ出版社から『ギター・のタブラチュアによるシャンソン、ガイヤール [他]』曲集第2巻』を出版。続く1558『リュートのタブラチュアの曲集第2巻』と『リュートのタブラチュアの曲集第3巻』を出版。

アルペール・ド・リップ（c1480-1551）：イタリアのリュート奏者と作曲家。ダ・ミラノほど厳格な対位法ではなく、アテニヤンやル・ロワほどダンサルではなく、それらの中間のルネサンス・リュートの曲を作曲した。

アドリアン・ル・ロワ（c1520-1598）：フランス人ギター奏者、リュート奏者、歌手、出版者、作曲家。1549、王からの特権を得たアドリアン・ル・ロワは、いとこのロベール・バラールとともに大きな出版社を設立。1551-1556にル・ロワとロベール・バラールは、ギター（4コースのルネサンス・ギター）のためのタブラチュア譜本を5冊出版。『ギターのためのタブラチュア譜本第4巻』（1553）はグレゴワール・ブレッサンのギター作品を収録する。

コスタンツォ・フェスタ（c1480-1545）：イタリアの作曲家。1510ごろにイスキアでd'Avalos家に奉仕し、パリのモンテンで勉強した。ジョスカン・デプレ没後からパレストリーナ登場までのイタリアにおける最も重要な作曲家の一人。

ジャン・リシャフォール（c1480-1547）：ルネサンス音楽の作曲家。フランス楽派。代表作は《ジョスカン・デプレ追悼のレクイエム》（1532）。おそらくエノーの出身で、フランス語を母語に育ったと思われる。1507年1509年までメヘレンの聖ロンボルト大聖堂の、1542年から1547年までブリュージュの聖ジル教会の聖歌隊長に就任している。リシャフォール作品のいくつかは、ルイ12世にかかわる公式行事のために作曲されている。1531年にハンガリー王妃マリアのブリュッセルの宮廷にも加わっていた可能性を示唆する文書がある。

アントニオ・ロッタ（?-1549）：リュート奏者。ロッタに関する伝記の情報はほとんどない。

ジュリオ・チェザーレ・バルベッタ（c1540-1603）：イタリア人リュート奏者、作曲家。パドヴァ生。『リュートのタブラチュア曲集第1巻』（ベニス：G・スコット、1569）、『ヘキサコルドとヘプタコルドの新しいタブラチュア』（ストラズブル：B・ジョビン、1582）、『リュートのタブラチュア』（ベニス：アンジェロ・ガルダノ、1583）を出版。1603には、同じくベニスのC・ヴィンチェンティから『3声のカンツォネッタのリュートタブラチュア』を出版。

ヘロルド手稿（1602）表題頁にはパドバで1602にクリストフ・ヘロルドにより写されたことある。彼は1578ハレ生、ライデン大（1598-1601）で法律を学び、1601パドバ大に移り1603博士号。ドイツ法集成のリーダーになる。ライデン大在学中おそらく、著名なオランダ人作曲家でリュート演奏家のヨアヒム・ファン・デン・フォープに師事。本手稿の幾つかはファン・デン・フォープの作、合作。内容は英国、フランス、ドイツ、オランダ、イタリアなど多くの国より影響を受ける。面白いことに最後の曲はバルベッタ作「ロシアのバレ／いわゆるDuda」である。

（原文 テレル・ストーン、補足用語集および邦訳：小鹿郁子、高橋京子、翻訳協力：村上政隆、アレックスandro・リバ）